

■ テーマ展「源氏物語-古典の継承と展開-」 作品リスト ■

番号	名称	作者	版・写	数量	制作年代	所蔵
【写し継がれた物語】						
1	げんじものがたり あかしのまき 源氏物語 明石巻		写本	1巻	鎌倉時代	当館(井伊家伝来)
2	げんじものがたり 源氏物語 いしやまでらまきえげんじだんす 附:石山寺蒔絵源氏簞笥	なかのいんみちしげ 中院通茂 写 1631-1710	写本	54冊	延宝3年 1675年	当館(井伊家伝来)
【写本から版本へ-受容層の広がり-】						
3	げんじものがたり 源氏物語 (承応三年版絵入源氏物語)		版本	60冊	慶安3年跋 1650年 承応3年刊 1654年	当館(井伊家伝来)
【註釈と評論-研究の進展と普及-】						
4	こうあんげんじろんぎ 弘安源氏論議	みなもとのともあき 源具顕 ?-1287	版本	2冊	弘安3年成立か 1280年 寛文元年刊 1661年	当館(井伊家伝来)
5	かちょうよじょう 花鳥余情	いちじょうかねら 一条兼良 1402-1481	写本	10冊	文明4年成立 1472年 江戸時代写	当館(井伊家伝来)
6	げんじものがたりききがき 源氏物語聞書	とくだいじきんふさ 徳大寺公維か 1537-1588	写本	1巻	室町時代末～ 安土桃山時代	当館(井伊家伝来)
7	げんじなんによししょうぞくしょう 源氏男女装束抄	そうせき 宗碩 1474-1533	版本	3冊	文政11年刊 1828年	当館(井伊家伝来)
8	こげつしょう 湖月鈔	きたむらきぎん 北村季吟 1625-1705	版本	60冊	延宝元年成立 1673年 延宝3年刊 1675年	当館(井伊家伝来)
9	しかしちろん 紫家七論 附系図	あんどうためあき 安藤為章 1659-1716	写本	1冊	宝永元年 1704年	当館(井伊家伝来)
10	しぶん さえずり 紫文あまの囀	たかはしち 多賀半七	版本	4冊	享保8年刊 1723年	当館(井伊家伝来)
11	たまのおぐし 玉小櫛	もとおりのりなが 本居宣長 1730-1801	版本	8冊 のうち	寛政8年跋 1796年	当館(井伊家伝来)
12	げんじものがたりひょうしゃく 源氏物語評釈	はぎわらひろみち 荻原広道 1815-1863	版本	8冊	嘉永6年刊 1853年	当館(井伊家伝来)
13	たまくら 手枕	もとおりのりなが 本居宣長 1730-1801	版本	1冊	寛政4年跋 1792年	当館(井伊家伝来)
14	しょうちゅうげんじものがたり 掌中源氏物語	おぎさまさよし 尾崎雅嘉 1755-1827	版本	1冊	天保8年刊 1837年	当館(井伊家伝来)
15	げんじうた 源氏歌		写本	1冊	天保10年 1839年	当館 (奥山六左衛門家文書)
16	げんじはいかいのくしゅう 源氏俳諧の句集		写本	1冊	元文2年 1737年	個人 (平田町町代中村家文書)
【描かれた物語】						
17	げんじものがたりずびょうぶ 源氏物語図屏風			6曲1双	江戸時代	個人
18	げんじものがたりずびょうぶ 源氏物語図屏風	さたけえいかい 佐竹永海 1803-1874		2曲1隻	江戸時代	当館
19	げんじはっけいてかがみ 源氏八景手鑑			1帖	江戸時代	当館(井伊家伝来)

■ テーマ展「源氏物語-古典の継承と展開-」 作品リスト ■

【芸能と遊びの世界】

20	うたいぼん 謡本 ゆうがお はじとみ うきふね たまかざら げんじくよう 「夕顔、半蔀、浮舟、玉葛、源氏供養」 あおいのうえ 「葵上」		版本	2冊	安永5年 1776年	当館(井伊家伝来)
21	うたいぼん 謡本 はじとみ あおいのうえ 「半蔀」「葵上」 ゆうがお たまかざら うきふね 「夕顔、玉葛、浮舟」 のみや げんじくよう 「野宮、源氏供養」		写本	4冊	江戸時代	当館(井伊家伝来)
22	のうめん ていがん 能面 泥眼	どうはくみつたか 洞白光喬 ?-1715		1面	江戸時代	当館(井伊家伝来)
23	のうめん ちゅうじょう 能面 中将	ゆうかんみつやす 友閑満庸 ?-1652		1面	江戸時代	当館(井伊家伝来)
24	ちゃじげんじぐるまもんようかたぎぬ 茶地源氏車文様肩衣			1領	江戸時代	当館(井伊家伝来)
25	もみじのがずちゅうけい 紅葉賀図中啓			1握	江戸時代	当館(井伊家伝来)
26	げんじこうみ 源氏香組	いいなおなか 井伊直中 写か 1766-1831	写本	1冊	江戸時代 18-19世紀	当館(井伊家伝来)
27	げんじこうのず 源氏香図		版本	1枚	江戸時代	当館(井伊家伝来)
28	ひちりき めいはいくんまる 箏篋 銘梅薫丸			1管	室町時代	当館(井伊家伝来)
29	こまぶえ 狛笛 ごしよぐるまにゆうがおまきえつつ 附:御所車に夕顔蒔絵筒			1管	江戸時代	当館(井伊家伝来)
30	げんじええがい 源氏絵絵貝			2組	江戸時代	当館
番外	うきよえ げんじじょうとうのけい 浮世絵「源氏上棟之景」	とよくにさんだい 豊国三代 ひろしげにたい 広重二代		3枚続 のうち	元治元年 1864年	当館(柳瀬初江氏寄贈)

写真解説

*番号は作品リストの番号と一致します。

2 源氏物語 附：石山寺蒔絵源氏筆筒 54冊 中院通茂 写

各 縦16.7cm 横17.2cm

〈筆筒〉縦21.2cm 横40.6cm 高26.8cm

江戸時代 延宝3年(1675)

当館蔵 (井伊家伝来)



公卿の中院通茂(1631-1710)に書写による源氏物語。通茂は宮廷の文化人として活躍し、その書は世尊寺流や御家流を研究した祖父通村の書風をよく伝えています。端裏書や奥書によれば、本書は、中院家伝来の家本によって寛文13年(1673)から起筆し、延宝3年(1675)に完成した由緒正しい「証本」だといえます。淡彩の草花図で彩られた表紙や華やかな蒔絵箱を得て、優雅な調度品となっています。江戸時代、印刷技術の発達によって源氏物語も版本が主流となりますが、上等な写本も一定数作られ続けました。

本を入れる筆筒の中で、源氏物語の冊子を納める筆筒を特に源氏筆筒と称します。源氏筆筒の中には、本筆筒のように、紫式部が源氏物語の着想を得たとされる石山寺の境内を意匠とするものがしばしば見受けられます。

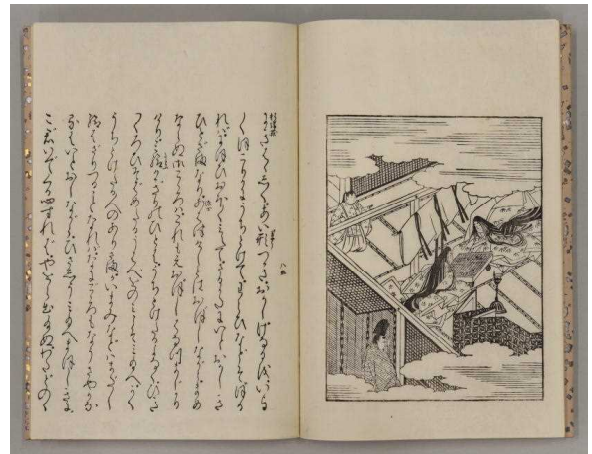
3 源氏物語 (承応三年版絵入源氏物語) 60冊

各 縦28.0cm 横20.0cm

江戸時代 承応3年(1654)刊

当館蔵 (井伊家伝来)

全帖に挿絵があることから「絵入源氏物語」と称される版本。慶安3年(1650)、歌人で蒔絵師の山本春正(1610-82)が、歌人で俳人の松永貞徳(1571-1654)の指導を得て編集したものです。本文に注釈や読点、濁点、振り仮名などが加えられた最初の版本で、挿絵は、これまでの源氏絵の影響を受けながらも、独自の解釈で描かれたと考えられるものもあります。



初版は慶安3、4年、承応3年版は再版で、後、50年以上にわたって再版・増刷が繰り返され、類似本も出るほどでした。本書のもつ多くの特徴は、これ以後に出た諸本でも概ね踏襲され、源氏物語を広く普及させた功績は極めて大きいものがあります。別冊附録として、源氏目案(上中下)、源氏系図、源氏引歌、山路乃露(鎌倉時代の補作)を加えた、計60冊から成ります。

8 ^{こげつしょう}湖月抄 60冊
^{きたむら きぎん}北村季吟 著

各 縦27.5cm 横19.5cm

江戸時代 延宝3年(1675)刊(延宝元年成立)

当館蔵(井伊家伝来)

延宝元年(1673)、歌人で俳人の松永貞徳^{まつながていとく}(1571-1654)の弟子、北村季吟(1625-1705)が著した書。源氏物語の全本文を掲げ、理解しやすい頭注・傍注の形で以てこれまでの諸註釈の要点を書き入れたもので、物語の読解を容易にし、江戸時代を通じて、さらには明治時代以降最も流布した源氏物語かつその注釈書です。

「湖月抄」は、それまでの注釈の成果の集大成的な性格をもちます。この「湖月抄」までの、師説の伝授によって継承されてきた注釈を旧注、以後、国学の勃興による、文献にもとづく実証的視点での注釈を新注と呼んで区別しています。

「湖月抄」の名は、紫式部が石山寺に参詣し、琵琶湖上の月を見て源氏物語を書き始めたという伝承からつけられました。



(表紙)

17 ^{げんじものがたりずびょうぶ}源氏物語 図屏風 6曲1双

各 縦88.3cm 横245.0cm

江戸時代

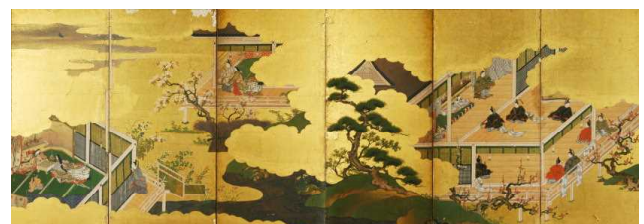
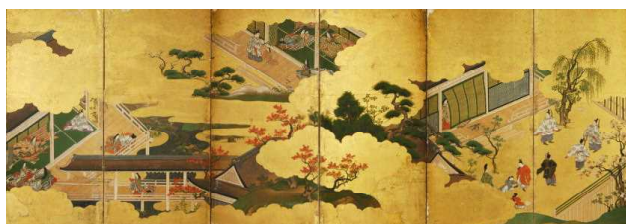
個人蔵

四季の景の中に源氏物語の6帖の画を俯瞰するように描いた屏風。室町時代には、源氏絵制作にあたって、物語から選択する場面がほぼ定着しました。

本作の場面は、向かって右から、「桐壺」「須磨」「空蝉」「若菜」「浮舟」「少女」。部分写真は、そのうちの「少女」の場面で、光源氏がおもだった夫人と子女を住ませた邸宅、六条院において、秋好中宮から贈られた紅葉を前にする紫の上と、横に坐す光源氏を描いています。



(部分)



樹木や草花、人物描写などから、江戸時代前期の狩野派の作品と判断されるもので、質の高い顔料で緻密に描かれ、当時の狩野派の本流の絵師の手になると考えられます。

29 ^{こまぶえ} 狛笛 附：^{ごしよぐるま} 御所車 ^{ゆうがおまき えつつ} に夕顔蒔絵筒 1 管

長さ18.1cm

江戸時代

当館蔵（井伊家伝来）

狛笛は、^{ががく} 雅楽の ^{こまがく} 高麗楽に用いる横笛。 ^{ふえづつ} 笛筒は割筒で、夕顔と御所車、そして ^{ひ おうぎ} 桧扇を蒔絵であらわす、源氏物語「夕顔」の帖に取材したデザイン。光源氏が姥の家を見舞った折、隣家に咲く夕顔の花に目を留め、とりに遣わせたところ、邸の住人より和歌とともに手折った花を扇にのせて贈られたという場面です。

人物を取ってあらわさず、周りの風景や事物だけでその存在を暗示する、という手法であらわされた文様を「^{る すもんよう} 留守文様（^{もよう} 留守模様とも）」と称します。広く流布した源氏物語からは、多様な留守文様が生み出されました。



30 ^{げんじ ええがい} 源氏絵貝 2 組（写真は うち 1 組）

縦5.9cm 横7.9cmほか

江戸時代

当館蔵

^{はまぐり} 蛤の貝殻の内側に絵を描いた貝は、ふたつに分けた貝片を合わせてとる ^{かい おおい} 貝覆（^{かいあわせ} 貝合とも）という遊びで使うものです。ぴったりと合う貝が2枚で1セットとなり、同じ絵が描かれます。



ここで紹介する貝には、王朝風の男女2人が描かれています。人物の顔は「^{ひきめ かぎはな} 引目鉤鼻」と呼ばれる様式で一筋の線のみで示し、室内は「^{ふきぬき やたい} 吹抜屋台」といって、視点を斜め上方に置いて天井を描かない技法であらわしています。いずれも、平安時代以来の伝統的な ^{やまとえ} 大和絵の描き方です。

「源氏絵」とは、本来的には源氏物語の絵を指す言葉ですが、江戸時代以降、何の絵か明確でないものであっても、王朝風の人物が描かれた絵を「源氏絵」と呼ぶようになりました。本作も、作り手使い手ともに源氏物語のイメージをそこに見たと思われる。